

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 2 日現在

機関番号：32644

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24500709

研究課題名(和文) 間主観性領域における身体知の機能を解明する現象学的・実験的研究

研究課題名(英文) A phenomenological and experimental study on the embodied knowledge in the intersubjective domain

研究代表者

田中 彰吾 (Tanaka, Shogo)

東海大学・総合教育センター・教授

研究者番号：40408018

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ひととひととのあいだで成り立つ社会的理解を、身体的な相互行為に基づいて解明することを目指したものである。従来の心の科学の議論では、ひとは一般に「心の理論」を用いて、他者の心的状態を推論によって理解すると想定されてきた。しかし、本研究の成果によると、最も基礎的な社会的理解は、他者の行為の意図を直接知覚すること、その意図に応じる行為を返すことから始まる。自他間のこの種の身体的相互行為が暗黙の社会的文脈を生成し、その文脈のうえで、私たちは言語的コミュニケーションを通じて明示的な相互理解に至るのである。このような意味で、私の身体と他者の身体のあいだが、間主観性の起源である。

研究成果の概要(英文)：This research project aimed to illuminate social understanding that generates between person and person on the basis of embodied interactions. In the current discussions of psychological sciences, it is generally considered that one understands the other's mental states through inference by applying the "theory of mind." However, according to the research result, the most fundamental aspect of social understanding is to directly perceive the intention of another's action, and to react in response to it. This kind of embodied interaction between the self and the other generates implicit social contexts, based on which we come to understand each other explicitly through verbal communications. In this regard, it is between my body and that of the other where intersubjectivity originates in.

研究分野：身体性哲学，現象学的心理学

キーワード：身体性 間主観性 他者理解 社会的認知 身体的相互行為 間身体性 現象学

1. 研究開始当初の背景

本研究の課題は、間主観性領域における身体知の機能を解明することであった。

(1) そもそも身体知とは、一般に「身体が知っている」「身体が覚えている」などと表現されるタイプの知識を指す。自転車の乗り方はその一例である。私たちは自転車に乗るさい、その手順をいちいち意識化したり、次にすべき動作を考えたりはしない。自転車に乗ろうと意図すれば、身体化された習慣に沿って、身体がなかば自動的に動き、必要な個別の動作をすべて実現してくれるからである。この例に見られるように、身体知とは、暗黙にはたらいっているが、身体が確かに知っている行為のしかたである (Tanaka, 2011)。

(2) 本研究は、これに先行して実施した科研費助成事業の研究成果 (2009~2011 年度、若手(B), 課題番号 21700607「生活世界における身体知」の包括的理論モデルの創出, 研究代表者: 田中彰吾) を受け、身体知研究を他者理解や社会的認知の領域に拡大することを目指して開始された。社会的認知の領域では、1980 年代以降、いわゆる「心の理論」が基礎的な議論として定着している。心の理論は次のような枠組みで他者理解を考える。すなわち、他者を理解することは、直接的に知覚できない「他者の心」を適切に理解することであり、「信念 + 欲求」という基本的構図に沿って他者の心的状態を推論することである (Astington, 1993 など)。

(3) この説明からも分かるように、心の理論では、他者の心を、直接には知覚できず、観察可能な行為の背後に隠れているもの、と前提している。心の理論は、身体とは別の次元にある内面にたどり着く方途であり、他者理解において身体性が積極的な役割を果たすことはない。しかし、生活世界における日常的な他者経験を振り返れば分かる通り、私たちは他者の意図や感情を、その身体の挙動とともに直接知覚している (Gallagher, 2008 など)。この種の直接知覚は、他者との身体的相互行為やコミュニケーションを繰り返すなかで身についた身体知としての性質を有する。身体知は、個人レベルの行為遂行においてだけでなく、対人レベルの相互行為でも作用しているのである (Tanaka, 2013)。

2. 研究の目的

本研究では、間主観性領域における身体知を解明することを目指して、現象学的な理論研究とともに、非言語的コミュニケーションに関する実験的研究を並行して実施した。

(1) 従来の身体知研究を概観してみると、スポーツ科学、認知科学、舞踊研究など、個別の分野でそれぞれの方法に依拠して研究が進められてきた。また、研究対象も、スポーツにおける高度な運動技能、職人が現場で見せる匠の技、ダンスにおける洗練された身体運用など、個人的で熟練された身体技法に注目する傾向が見られた。本研究では、生活

世界における一般的な経験を重視しつつ、他者理解という対人関係の領域を扱うことで、身体知研究の射程を拡大することを試みた。

(2) 課題名称に含まれる「間主観性」は、もともとフッサール現象学において提唱された概念であり、自己と他者の共同的な作用によって成立する主観性のあり方を指す。間主観性に関する研究のなかで、他者の構成という基本的な局面に着目すると、現象学の議論は、心の科学における社会的認知や他者理解の問題とも接点が生じてくる。とくに、自己は他者の心をどのように知りうるのか、という問いを立てれば、両者の問題意識はさらに密接に関係してくることになる。本研究で試みたのは、心の科学と連続する局面で、現象学的な理論研究を取り上げ直し、現代的な観点からその意義を再考することであった。

(3) 本研究を計画した時期は、先述した「心の理論」だけでなく、ミラーニューロン研究の発展を背景として、社会脳についての議論が盛んになされつつあった。本研究で検討したかった課題のひとつは、ミラーニューロンの機能が、前節(3)で言及した直接知覚説とどのように関係するか、という点であった。他の個体がある行為をするのを見ている状態と、自己が行為するときとで同じ神経活動が生じるとすると、それは現実の他者知覚において何を意味するのだろうか。他者の行為のシミュレーションを自己の脳内で実行しているとの解釈があるが (Gallese & Goldman, 1998)、この主張と直接知覚説の異同について検討することも、重要な課題であった。

(4) 本研究では、非言語的コミュニケーションに関する実験を構想し、非言語的で身体的な相互行為がコミュニケーションに与える影響を評価する計画を立てた。先述したように、私たちの他者理解が知覚と行為の次元に基礎を持つとするなら、言葉を始めとする有意義な記号的メッセージの交換もまた、自他間における非言語の身体的な知覚と行為の絡み合いによって支えられているだろう。このような発想のもと、二人ペアで即興の描画を行いつつコミュニケーションを図る、という場面を題材とする実験を計画した。

3. 研究の方法

次の四点を中心にして研究を実施した。

(1) 心の理論について批判的検討を行った。心の理論の内実については、「理論説」と「シミュレーション説」のあいだで論争が繰り返されてきた (Davies & Stone, 1995)。理論説は、心にまつわる常識的理論 (素朴心理学) を適用することで、他者の心的状態を理解するという。人は一般に、何らかの欲求を持ち、それに関連する信念を用いることで、特定の行動を見せる (例えば、のどが渇いており、冷蔵庫のなかに冷えた水があることを知っていれば、冷蔵庫を開ける)。行動から心的状態へ遡る場合も、心的状態から次の行動を予測する場合も、素朴心理学を用いて推

論しているとされる。他方、シミュレーション説によると、私たちは相手の立場に自分を置いて、他者が感じ考えることを模擬するという（例えば、逃走中の被疑者の立場からすると、人口密集地帯に隠れるほうが安全だと考えるだろう、と想像する）。つまり、理論説は、三人称的観点に立ち、自己にも他者にも等しく当てはまるような客観的な推論を通じた他者理解を強調している。他方、シミュレーション説は、主観的な想像力を通じて相手の状態を模擬するという、一人称的観点にもとづく他者理解を強調する(Fuchs, 2013など)。本研究では、理論説とシミュレーション説、双方の立場の隠れた共通性を見出し、それらを越える理論的立場を求めた。

(2) 理論説とシミュレーション説に代わる他者理解の第三の立場を模索するうえで手がかりとしたのは、現象学者メルロ＝ポンティの「間身体性 (intercorporité)」の概念である (Merleau-Ponty, 1945, 1951, 1960)。メルロ＝ポンティは、一方でフッサールの間主観性理論を参照しつつ、他方で当時の心理学を検討しつつ、この概念を提示している。メルロ＝ポンティは、今日の心の理論が登場するはるか以前から、心理学のはらむ根本的問題を指摘している。それは、心が私秘的で、本人にのみ直接的に接近しようとする前提である（これは心の理論が暗黙に前提としていっていることでもある）。この前提に立つ限り、他者の心は自己から見ると、接近不可能な深淵によって隔てられており、それを越えるため何らかの特別な操作（例えば類推による他者理解）が必要となる。メルロ＝ポンティはこのような前提を覆すべく、間身体性の概念を導入する。間身体性は、自己の身体と他者の身体のあいだに潜在的に広がる相互的關係である。本研究では、間身体性が具体的にどのような事態を意味し、どのように定式化できるのか、文献を整理しつつ考察した。

(3) 間身体性の立場は、ミラーニューロンの機能とどのように関係するのだろうか。先述したように、直接知覚説においても、暗黙のシミュレーション説においても、ミラーニューロンについて言及されることがある。本研究では、ミラーニューロンの発見者であるリゾラッティの研究 (Rizzolatti & Craighero, 2004 など) や、他の関連する社会脳研究を参照しつつ、間身体性の概念にもっとも整合性のある解釈を求めた。

(4) 即興の描画を用いる非言語的コミュニケーションの実験をデザインし、データを蓄積した。実験は次の順序で行った (田中, 2013)。(a) 2人1組で即興の描画を行いながらコミュニケーションを図る。開始から終了まで、言語は使用しない。(b) 実験中、設置された2台のビデオカメラを用いて、手元の紙面と、全身の映像を記録する。(c) 終了後、それぞれの実験参加者に簡単なインタビューを実施し、主観的なコミュニケーションの成立度を5段階で評価させる。映像の分析枠組

みとして念頭に置いたのは、非言語レベルで生じる身体間の同調と同期である。コミュニケーション研究の分野では synchrony, entrainment といったキーワードが知られているが、本実験データの分析に応用するには、概念の整理が不十分に思われた。そこで、間身体性の概念を念頭において先行研究を整理し、映像データを分析可能にするカテゴリーを新たに考案することにした。

4. 研究成果

テーマ別の成果および今後の課題について以下に記す。

(1) 身体知研究

2012年度から2013年度にかけて、身体知研究についての講演や執筆の依頼が増えたこともあり、前年度までの成果を振り返りつつ、生活世界における身体知の機能とその重要性について論じる仕事を重ねた。発表____、論文____がこれに該当する。

以上の発表と論文では、身体知の基礎を身体図式の機能に求めて考察した。身体図式とは、姿勢と運動を意識下で制御する枠組みであり、人が環境に向かって何らかの行為を取る場面で、それに必要な身体部位の運動を全体として調整している (Merleau-Ponty, 1945 など)。水の中での泳ぎ方や自転車の乗り方などが、一度身につくと忘れることなく「身体が覚えている」状態になるのは、特定の運動スキルが身体図式へと組み込まれるからである。運動学習において「コツをつかむ」と呼ばれる事態がここで生じている。

身体図式に組み込まれた運動スキルをもとに行為する場合、人は一挙手一投足について意識しなくても、なかば自動的に、身体どの部分をどこに向かってどのように動かせばよいか、ということを知ることができる。これが「身体が知っている」状態である。身体は知の主体として、与えられた状況のなかでの行為のしかたを知っている。言うまでもなく、知の主体として振る舞うことができる身体は、運動の実行器としての身体と、運動指令の発信元としての心とに二分されていない。行為の意図は即座に、環境へと向かう身体の挙動として表現される。

身体が知っている行為のしかたは、たんに運動スキルの領域だけでなく、知覚にも浸透する。太陽光を反射する海は、泳ぎ方を知っている人には、たんに「輝く水面」としてだけでなく「泳げる場所」としても知覚される。身体を取り囲む環境は、「座れる面」「遊べる砂場」等、潜在的な行為可能性 (アフォーダンス) を提供する場所として現われる。知覚は、受動的に刺激を環境から受け取って、それを内界で再編する過程ではない。環境を能動的に探索し、行為可能性を発見する過程である。行為において統合されているという意味で、知覚は本来、感覚モダリティに分断できない共感覚的なものである (発表____)。

生活世界が身体知に満ちており、身体知が

行為と知覚を全般的に支える基礎的現象であるとするなら、これを起点にして教育のあり方を考え直すことも、教育現場における重要な課題であろう。図書では、身体と環境との関係に焦点を当て、身体を取り囲む環境を改善することで、教育改革を実現できる可能性があることを論じた。

(2) 間身体性の定式化

メルロ＝ポンティのテキストを読解しつつ、間身体性の概念を定式化することを試みた。前項(2)で述べた通り、間身体性は、自己の身体と他者の身体のあいだに潜在的に広がる相互的關係である。身体知研究を土台とする本研究の立場からすると、間身体性は、知覚と行為の水準においてとらえ直すことが可能であるので、その想定のもとでテキストを読解する作業を進めた。

間身体性の具体例としてしばしば引き合いに出される「あくびの伝染」「もらい泣き」などの現象は、他者の行為を知覚すると、自己の身体で同じ行為を意図せず反復してしまう現象を指す。この場合、他者の身体を知覚することは、同じ行為を自己の身体において反復することである。あるいは、実際に同じ行為を反復しなくても、他者の笑顔につられて思わず微笑みそうになるように、他者の行為と同じ行為の可能性を、自己の身体において反芻することである。

社会的認知と間主観性の文脈に引きつけて言うと、最も基礎的な他者理解のあり方は、知覚的、感覚・運動的である (Gallagher, 2004)。他者の行為を知覚することは、それと同じ行為の可能性を、自己の身体感覚・運動的次元において誘発する。このような潜在的連環が自他の身体間にあるからこそ、他者の行為の意図や、他者の身体が表現する感情を、直接的に知覚できるのである。ミラーニューロンの基本的な機能も、他者の行為の意味を感覚運動的に把握することにある (Rizzolatti & Sinigaglia, 2008)。その意味で、ミラーニューロンは直接知覚説を支持するのであり、シミュレーション説を支持するのではない(この点は、2012年にリゾラッティ氏が来日した際、個人的に確認した)。

間身体性の現われ方には、以上とは異なる別のパターンもある。先に述べた通り、知覚が能動的に行為可能性を探索する過程だとすると、社会的知覚(他者の身体知覚)は、他者に向かって行為する可能性を探索する過程である。つまり、人は、他者の身体を見て、そこに行為の意図や感情を知覚しているだけでなく、その行為や感情に対して自分がどのように関与しうるかという点まで含めて知覚するのである。例えば、他者と同じテーブルで食事をしている最中、他者が塩に手を伸ばしたとする。その手が届かないのを見て、私は塩を取って相手に手渡し、相手もそれを受け取る。ここで生じているコミュニケーションは、「他者の行為の知覚→その意図の理解→意図に応じた自己の行為→それに

応じる他者の行為…」という、一連の身体的相互行為 (embodied interaction) である。

それゆえ、間身体性は、第一に、他者の行為と同じ行為(またはその可能性)を自己の身体において再現すること、第二に、他者の行為の意図に回答して、自己の行為を送り返すことである。既存の心理学研究のなかでは、このような身体的相互行為は、主に非言語的コミュニケーションの分野で概念化されている。第一のパターンは行動の同調 (behavior matching)、第二のパターンは相互行為の同期 (interactional synchrony) と定義される (Bernieri & Rosenthal, 1991)。以上の理論的整理は、発表____、論文____を通じて行った。また、本研究にきわめて近い立場から間身体性と間主観性を取り上げた論文 (Fuchs & De Jaeger, 2009) を、図書において訳出した。

(3) 社会的認知

このように、社会的認知の基礎理論として間身体性を定式化すると、他者理解について再考すべきことが出てくる。他者理解とは、アクセス不可能な私秘的領域に向かって、心の理論やシミュレーションを介して接近することではない。他者理解は、身体的相互行為がかみ合うことで生成する動的な過程である。他者は自己との関わりのなかでしか与えられないのであって、その関わりが同調や同期を通じて展開すれば、相互理解に通じるし、逆に同調や同期がともなわなければ、他者は十分に理解できない。他者理解とは、自己と他者との共同作業なのであって、自己が一方向的に処理する認知過程ではない。

だとすると、社会的認知は、理論説でもシミュレーション説でもなく、身体的相互行為を基盤として再編されねばならない。同調と同期をともなう身体的相互行為は、例えばテニスのラリーのように、ある局面まで繰り返されると、それ自身の生命を持つかのように、自律的に展開し始める (Fuchs & De Jaeger, 2009)。自律性をもって推移する相互行為は、自己によっても他者によっても、完全にコントロールすることができるわけではなく、ひとつのシステムとしての性質を持つ。

喩えて言うと、音楽を合奏したり、共にダンスを踊るような関係として相互行為が展開するのである。このような相互行為は、協調したり拮抗したりしつつ、局面ごとに各種の情動を生じさせる。他者理解は、自他の「あいだ」に広がるこうした情動を背景的文脈として成立する。例えば、かみ合わない相互行為の気まずさが文脈として与えられると、理解できない相手として他者は現われるだろう。逆に、テンポ良く会話が弾む場合、楽しいという感情を背景に、自己の言い分を理解してくれる相手として他者は現われてくる。他者理解とは、身体的相互行為を通じて、自他が共同で創造する過程なのである。このように、理論説とシミュレーション説をともに批判し、身体的相互行為を通じて創造する過

程として社会的認知をとらえ直す議論は、発表____、論文____において展開した。

(4) 非言語的コミュニケーション実験

前項(4)で述べた通り、実験をデザインしてデータを蓄積した。先述した通り、他者理解がコミュニケーションを通じて与えられ、身体的相互行為の同調や同期を基盤とするのであれば、次のような仮説を考えることができる。言語を使わず、即興で描画を行うというやり方でも、なお参加者が「コミュニケーションが取れる」と主観的に感じることができるとするなら、それは非言語レベルの身体的相互行為が、高い同調と同期の水準を保っており、相互理解に必要な背景的文脈が共有されているからであろう。

このように仮説を立て、検証するためのカテゴリーを考察した。基本的には、非言語行動が同調して出現する場合(例えば、共に笑顔になる、等)と、同期して出現する場合(例えば、一方が紙を差し出すと相手が受け取る、等)に区別した。分析はまだ終了していないが、標本データを検討したところ、一定の見通しを持つことができた。それは、実験参加者の主観的なコミュニケーション成立度とともに高い場合、非言語行動の同調が出現する頻度が優位に高いということである(同期についてはその傾向が見られない)。以上の考察は、発表____、論文____において展開した。

(5) その他

研究を推進するうちに、当初の計画とは別の問題系に属する課題が浮上してきた。それは、自己が他者を理解するという社会的認知の問題以前に、そもそも自己という存在はどのように身体と関係しているのか、また、他者という存在はどのように出現するのか、という問いである。身体知研究のひとつの重要な論点に心身二元論の克服という課題があるが、それと同様に、「身体化された自己」を解明することが求められるのである。また、そのように身体化された自己は、デカルト的な閉じた自己とは違って、最初から他者との関係に開かれた自己である可能性を考慮せねばならない。

言い換えると、個体に閉じた心身だけを問題にすればよいのではなく、複数の身体のあいだで、知覚する-知覚される、はたらきかける-はたらきかけられる、という関係を通じて、自己が自己として成立し、他者が他者として出現する、という局面をとらえねばならない。すなわち、身体的な間主観性の領域から、自己の主観性と、他者の他者性がともに立ち上がってくる現象を理解する必要がある。代表者は、2013年度以降、この問題系の重要性に気づき、複数の発表で考察を重ねた。発表____がこれに該当する。

(6) まとめと今後の課題

以上の研究を振り返り、今後の課題を明確にしておきたい。本研究の最大の成果は、身体性まで遡って社会的認知と他者理解をとらえ直し、身体的相互行為の同調と同期を

じて間主観性が生成する過程をモデル化したことにある。他方、残された課題は、(a)実験データの分析を通じて、身体的間主観性モデルの妥当性を検証すること、(b)身体的間主観性の領域から、自己の主観性と他者の他者性がどのように立ち上がってくるかを理解すること、である。2015年度から、科研費による2件の助成を新たに研究代表者として受けられることになったので、残されたこれらの研究課題を着実に実行したい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計10件)

Shogo Tanaka. (2015) Intercorporeality as a theory of social cognition. *Theory & Psychology*.(Online First, published May 6) DOI: 10.1177/0959354315583035, 査読有

Shogo Tanaka. (2015) Social understanding as a creation: Intercorporeality and aida. *Bulletin of Liberal Arts Education Center, Tokai University*, 35, pp. 49-58, 査読無

Shogo Tanaka. (2014) Creation between two minded-bodies. *Academic Quarter*, 9, 265-276, 査読有

Shogo Tanaka. (2013) The notion of embodied knowledge and its range. *ENCYCLOPAIDEIA: Journal of Phenomenology and Education*, 37, pp. 47-66. DOI: 10.4442/ency_37_13_03, 査読有

田中彰吾 (2013)「運動学習におけるコツと身体図式の機能」『バイオメカニズム学会誌』Vol.37, No.4, pp.207-212, 査読無(招待)

田中彰吾 (2013)「知の主体としての身体」『体育科教育』(大修館書店), 第61巻第9号, pp.10-13, 査読無(招待)

釜崎太, 田中彰吾, 生田久美子, 樋口聡 (2013)「身体知研究の現在 - 身体教育の可能性を探る」『体育哲学』, 第43号, pp.73-76, 査読無

田中彰吾 (2013)「即興的な描画を用いた非言語的コミュニケーションに関する予備調査」『東海大学総合教育センター紀要』, 第33号, pp.27-43, 査読有

Shogo Tanaka and Masahiro Tamachi. (2013) A phenomenological view on the theory of mind. *Bulletin of Liberal Arts Education Center, Tokai University*, 33, pp.93-100, 査読無

Shogo Tanaka. (2013) The notion of intercorporeality and its psychology. *Bulletin of Liberal Arts Education Center, Tokai University*, 33, pp.101-109, 査読無〔学会発表〕(計18件)

田中彰吾「身体性から考える自己と他者」第8回臨床精神科リハビリテーション研究会, 2014年11月29日, 神戸学院大学.

田中彰吾「Phenomenological reconsideration of the Theory of Mind」日本心理学会第78回大会公募シンポジウム「社

会的認知と現象学」(企画・司会:田中彰吾, 話題提供:田中彰吾,植田嘉好子,ダレン・ラングドリッジ,指定討論:渡辺恒夫)2014年9月12日,同志社大学.

Shogo Tanaka. "Social understanding as a creation: Intercorporeality and aida", 39th Annual Conference of the International Merleau-Ponty Circle, 2014 August 30th, University of Geneva, Switzerland.

田中彰吾「現象学と心の科学 - 他者理解の問題を中心に」第72回心の科学の基礎論研究会,2014年7月19日,明治大学.

Shogo Tanaka. "The body-as-object and its related issues in social cognition", Research Colloquium: Philosophy Meets Cognitive Science, Center for Mind, Brain and Cognitive Revolution, 2014 February 6th, Ruhr-University Bochum, Germany.

Shogo Tanaka. "Body-as-object and the social cognition", Colloquium of the Centre for Psychosocial Medicine, 2013 December 17th, University of Heidelberg, Germany.

Shogo Tanaka. "Creation between two minded-bodies", Workshop: Socializing (with) the embodied mind (organizer: K. Miyahara, speaker: M. Kataoka, M. Kureha, S. Tanaka, N. Gangopadhyay), 2013 September 24th. Rikkyo Univeristy, Japan.

田中彰吾「自己へのエンボディード・アプローチ」日本心理学会第77回大会公募シンポジウム「自己へのエンボディード・アプローチ」(企画・司会:田中彰吾,話題提供:田中彰吾,嶋田総太郎,河野哲也,指定討論:春木豊),2013年9月20日,札幌コンベンションセンター.

Shogo Tanaka. "Creation between two bodies: Intercorporeality re-visited", 32nd International Human Science Research Conference, 2013 August 15th, Aalborg University, Denmark.

Shogo Tanaka. "Intersubjective dimension of the body: An introduction", Workshop: Intersubjective Dimension of the Body (organizer: S. Tanaka, speaker: S. Tanaka, Dorothee Legrand, Satoshi Higuchi, discussant: Kohji Ishihara, Line Ryberg Ingerslev), 2013 July 21st, Tokai University, Japan.

田中彰吾「共感覚について - メルロ＝ポンティの視座から」日本感性工学会第8回春季大会,感性哲学部会ワークショップ「身体から感性を考える」(司会:根津知佳子,話題提供:田中彰吾,樋口聡,佐々木能章),2013年3月7日,北九州国際会議場.

田中彰吾「身体意識と自己意識 - D・ルグランの身体論」身心文化論研究会,2012年12月26日,広島大学東京オフィス.

田中彰吾「描画コミュニケーション実習に

関する予備調査:実験のデザインに向けて」日本認知科学会第29回大会,2012年12月14日,東北大学.

田中彰吾「間主観性領域における身体知の機能を解明する現象学的・実験的研究」東海大学産学連携フェア2012,2012年12月6日,東海大学.

Shogo Tanaka. "The notion of intercorporeality and its psychology", Workshop: Embodiment and Intersubjectivity, 2012 October 7th, Tokai University, Japan.

田中彰吾「身体知の概念とその射程」第13回身体知研究会,2012年9月15日,北陸先端科学技術大学院大学東京サテライト.

田中彰吾「身体知の現象学と心理学」日本質的心理学会第9回大会シンポジウム「質的心理学としての現象学」(企画・司会:渡辺恒夫,話題提供:植田嘉好子,田中彰吾,渡辺恒夫,指定討論:西研),2012年9月2日,東京都市大学.

田中彰吾「身体知の哲学」日本体育学会第63回大会シンポジウム「身体知研究の現在 - 身体教育の可能性を探る」(企画・司会:釜崎太,話題提供:田中彰吾,生田久美子,樋口聡),2012年8月24日,東海大学.

〔図書〕(計2件)

学校空間研究者グループ編著『学校空間の研究 - もう一つの学校改革をめざして』コスモスライブラリー,2014年(分担,理論編12:田中彰吾「身体知としてのアフォーダンスと学校空間論」pp.48-58,理論編13:田中彰吾「生きられる空間—空間を考えるための方法論的観点」pp.59-71.)

石原孝二,稲原美苗編『UTCP-Uehiro Booklet 2: 共生のための障害の哲学: 身体・語り・共同性をめぐって』University of Tokyo Center for Philosophy, 2013年(分担, T・フックス, H・デ・イエーガー「エナクティブな間主観性 - 参加的意味創造と相互編入」田中彰吾訳, pp.193-221.)

〔産業財産権〕

該当なし

〔その他〕

ホームページ等

研究アーカイブおよび研究会案内(日本語)「Embodied Approach」

http://www.geocities.jp/body_of_knowledge

研究ブログ(英語)「Embodied Approach」

<http://embodiedknowledge.blogspot.com/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田中 彰吾 (Tanaka Shogo)
東海大学・総合教育センター・教授
研究者番号: 40408018

(2) 研究分担者

該当なし

(3) 連携研究者

該当なし